

CRCと医療人育成

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/35206

〔抄録〕第28回 日本臨床薬理学会年会 2007年11月28日～12月1日 宇都宮
CRCのためのトワイライトセミナー第1部：CRCの業務拡大に対応する継続教育を考える

2. CRCと医療人育成

石崎 純子*

1. はじめに

私は金沢大学（以下、本学）医学部附属病院で病院薬剤師として勤務し、そのうち、4年5カ月の間、CRCとして治験に関わってきた。現在、大学の教員となり、3年目を迎えているが、「CRCをしていてよかった」と常日頃感じている。それは、「患者中心の医療」や「チーム医療」を実際に経験できたからである。また、インフォームド・コンセントの難しさ、新薬を心待ちにしている患者の思い、そして、被験者に対して、治験の質を確保するための患者日誌の記載などをお願いした際に、快く、真面目に対処していただいたときの感動といった経験を講義に盛り込むことで、学生の医療人を目指す意欲が高まるように思えるからである。しかし、講義で話を聞くよりも、実際の臨床現場での体験や見学が勝ることは言うまでもない。本稿では、私がCRC業務を通して学んだこと、その経験を教育にどう生かしているか、臨床現場で本学附属病院のCRCが実習指導を通して医療人育成にどう関わっているかについて紹介し、教育面でCRC経験者あるいは、現在CRCとして活躍中の皆さんが医療人育成にどのように関わられるかについて述べる。

2. CRC業務を通して学んだこと

CRC業務の目標は「質を確保した治験の円滑な実施」であるが、この目標は個々のCRCの力だけでは達成が困難であり、多くの関係者の協力が不可欠である。病院薬剤師の業務も調剤中心から薬剤管理指導業務といった、患者に接し、他の医療関係者との協力が要求される業務内容に変化してはいる。しかし、CRC業務を通して、薬剤管理指導業務で修得するよりも短期間で、各職種の専門性を考慮した「患者中心の医療」「チーム医療」の実践を常に意識することを学べたように思う。また、被験者である患者と接することより、

患者こそが新薬開発を切望している、そして、「説明」すること、「理解」を得る、「納得」いただく、「実行」していただく、ということがイコールではないことを改めて認識した。

3. CRC経験を教育にどう生かしているか—本学での実習（服薬指導ロールプレイ）を例として—

薬学教育6年制に向けて多くの大学で学生のコミュニケーション能力の向上を目指し、ロールプレイが取り入れられている。本学でも数年前より服薬指導ロールプレイが実施されていたが、カリキュラムに記載されていた学生の到達目標は、医療人の卵として初めてトレーニングする学生にとっては抽象的で難解であるように思えた。そこで、学生に「患者に一方的に伝える・聞くことと、患者との会話を通して伝える・聞くことの違いを説明できる」という到達目標を課した。しかし、この到達目標についても治験での説明と同様に、「説明」すること、学生が「理解」「納得」「実行」することはイコールではなかった。そこで、学生が自ら気づく機会を提供することを目的として、服薬指導での注意点を盛り込んだIT教材を作成した。

Fig. に、その1例を示す。患者の呼び入れ、確認から始まり、薬の名前、飲み方など服薬指導の基本情報

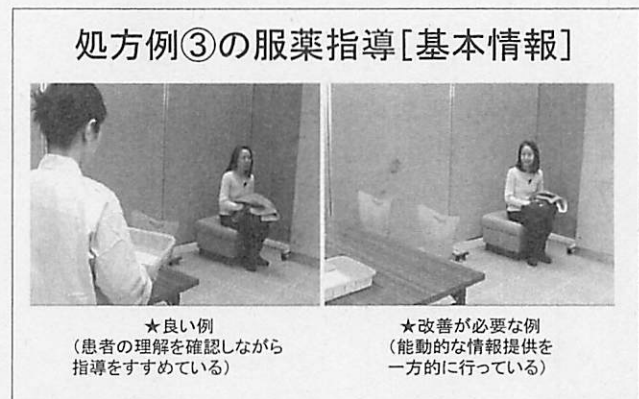


Fig. 服薬指導での注意点を盛り込んだIT教材の例

* 金沢大学大学院自然科学研究科（現、金沢大学医薬保健研究域）薬学系臨床薬物情報学研究室
〒920-1192 金沢市角間町

を提供する場面について、良い例と改善が必要な例について動画で示したものである。改善が必要な例は、必要な項目はすべて説明しているが、患者への配慮が不十分で情報提供を一時的に行うといった、初心者にありがちな例を意識して作成した。

この教材を提示して、実際にロールプレイを行い、その後、振り返り、全体で討論する。評価のポイントは、あいさつ、自己紹介、患者の確認、アイコンタクトができたか、一方的な説明でなく、できるだけ患者の話を聴こうとしているかという点である。討論では、「分かっているけど忘れる」「分かりやすい表現が出てこない」「患者さんからの情報収集が難しい」といった意見が毎回出され、医療人の卵なりに、「説明」と「理解」「納得」「実行」とがイコールではないことに気付き改善しようという姿勢が感じられ、IT教材活用により効率的な教育が実践できた。

4. CRCが実習指導を通して医療人育成にどう関わっているか—本学医学部附属病院での実習を例として—

本学附属病院では、医療薬学専攻の大学院生を対象に7カ月間の病院実習を行っている。そのうち20日間は、一般調剤、注射薬調剤といった7課題について基礎の実務実習を集中して行う。学生は4グループに分かれ、7課題をローテーションする。治験薬管理についても3日間行うが、学生にとっては3日でも、担当するCRCは全12日間、業務に加えて実習を担当することになる。

治験薬管理の実習内容は、①CRCの患者対応の見学、②治験薬の調剤・鑑査の見学、③治験関連書類の内容把握、④事前ヒアリングへの参加である。担当CRCが実習にあたって注意した点は、①については、最低1被験者の見学を目標とする、②については、特定の治験薬の調剤・鑑査だけでなく、治験薬全体の管理も含め約1時間かけて説明し、見学させる、③については、患者対応や調剤・鑑査などで実際に関与した治験のプロトコル等を読ませる、④については、下読み後、担当CRCと意見交換し臨む、とのことである。

実習終了後、担当CRCに意見を求めたところ、「学生の治験に関する知識が不足しており、そのつど、解説が必要である。解説に時間を費やすとデスクワークの時間が取れなくなるので負担が大きい。しかし、実習を通して治験やCRCに興味を持つ学生が1人でも増えれば、臨床試験の推進につながり励みになる」との意見が出された。

Table 治験薬管理の感想

1. 治験薬の残数確認、処方鑑査など何重にもチェックしており、治験薬の管理の重要性を実感した。
2. 冷蔵庫の温度を記録しておくなど、プロトコル逸脱防止のための様々な工夫に驚いた。
3. 患者の視点を常に考える必要がある。
⇒負担を少なくする・安全性
⇒良い薬を早く承認させる
(データを無駄にしないなど)
4. 研究的要素を含むため、常に根拠が必要となる。
5. CRCは治験に不可欠な存在である。

実習報告会での発表内容より引用

20日間の基礎実務実習終了後、学生は、学んだ内容や感想などを実習報告会で発表する。Tableに、治験薬管理の実習での感想を、実際の学生の発表より引用して示す。1, 2より、学生は、治験薬の厳密な管理が質の確保のうえでいかに重要かを認識したようである。また、3~5より、3日間の実習期間で「患者中心の医療」や「患者こそが新薬開発を切望している」ことを学んだようである。

臨床現場での実習は、CRCにとっては負担が大きいが、医療人育成面での教育効果も高い。今後、本学では、私も含めた学外実習を担当する臨床講座の大学教員と、現場のCRCとが密に連携・分担し、現場の負担を最小限とした教育効果の高い実習を実践していく予定である。

5. おわりに

今後、患者や他の医療従事者と共感し信頼関係を構築できる医療人を育成するため、臨床現場での見学や実習がさらに増加するであろう。一方、教育は、その効果が見えはじめるまでにある程度の期間を要するため、徒勞に感じることもあるかもしれない。また、CRC業務の多忙さは十分認識している。しかし、社会の求める医療人育成のために、CRCの皆さんには、是非、実習教育を通して医療人育成に積極的に関わっていただくことを切望する。教えるということは相手に与えるだけではなく、自己の知識の確認とレベルアップにもつながる。すなわち、CRCが医療人育成に関わることで、CRCを目指す学生が増え、CRC自身も向上することにより、近い将来、今よりさらに、質を確保した治験の推進が可能になると確信する。